怪しい集団に囲まれ、ピンチの監督。**釘バットや木刀で、容赦なく襲いかかられる**。
監督は何かに気付いたらしく、ハイキックで一人のお面を割る。そして、この怪しい集団は、**ラグビー部員達であることが判明**した。

しかし、
監督「ラグビーでケリはついたと思ってたが、あんなんで言いなりになる連中じゃなかったな。なんせ、てめえらがやってないことは殺人くらいのもんだからな！」と動じない。
しかし、**さっきから監督は殺されかけていると思うのだが**、大丈夫なのだろうか。

投げられたナイフで顔に傷をつけられると、監督はさすがに怒ったか、「たった今から、俺は女であることを忘れたるっ！！」と**よく意味のわからない宣言**。
すると、最強すぎる監督。木刀を奪うと、「**剣道三倍段**ってのを知ってるか？剣道有段者が剣を手にすれば、他の武道有段者の三倍強いんだ！」と自身満々。
「こちとらケンカ十段でェ〜〜っ！！」と襲いかかる部員達を**あっさりボコボコにした**。

強すぎる。**アマゾネスどころか、サイヤ人**なのではないだろうか。
そして、大将の真木をも屈服させることに成功した。

翌日の学校。
校長室で監督がなにやら驚いている。どうやら、校長が「今年の全国大会で準優勝した堂園高校と試合をさせる」と言い出したようである。
校長「あいつらが、ルールをおぼえたり基礎練習をやったりすると思うか？体でおぼえさせるしかないんじゃい！」と言い張る。
堂園高校としてははた迷惑な話である。試合中に殺されたらどうするつもりなのだろうか。

監督「そいつには賛成だが･･･しかし、ラグビーの前に、性根をたたき直すのが先だと思うがな･･･」とまだ半信半疑。
すると、
校長「**その性根をな･･･ラグビーで叩きなおしてやるんじゃい！**」
と再び名台詞でキメた。カッコいいぞ、校長。

監督が練習場に顔を出すと、なんと、部員が三人（一人は清水君）しかいない。当初からマジメな清水君は何らかの罪を犯した人とは思えないのだが、それに対する言及は作品中にはない（笑）。
そして、叶は遠くで漫画を読んでいる。当然、冴木監督、
監督「他の連中はどうしたっ！主将がそんなことも知らないでどうすんだっ！」
と一喝する。
叶は「なりたくてなったんじゃないよ･･･」と**ゴネる**が、「なんならまたケリをつけようか！」と息巻く監督を前にして根負けしたのか、冴木を監督として、自分を主将としてついに認めた。ちなみに、他の部員は闇討ちに失敗したことで、気力が萎えて来なかったようである。**案外ヘタレ**な奴らだ。

叶は部員達にあさって試合があることを伝えにくる。当然不平不満を漏らす部員達。
真木「叶･･･お前あのアマとグルか！？」
叶「知るか、伝えられただけだ。」
真木「いっぱしに主将ぶりやがってよぉ！」
叶「俺が主将なのが気に入らないのなら、いつだって相手になってやるよ･･･もともとケンカで決めた主将だ。」
ケンカで主将を決めた効力が如実に表れている。叶、キャプテンらしい振る舞いの後、**立ち去っていく**。さすが立ち去り名人。

試合当日。いよいよ、全国区の堂園との対戦である。
堂園は、怪我上がりとは言え有名プレイヤーである‘**白鷺弾**’を擁している。そして扶桑高の校長が**元全日本監督の蓬莱大三**ということもあって、メディアの注目も高いようだ。
校長、やっぱり凄いお方だったんですね。
白鷺「まともな練習場もない俺達に比べて、専用グラウンドを持っていて羨ましい限りっスね！負けられないっスねェ、こんなチームには！」
とインタビューに答えている。むしろ、専用グラウンドもないのに、堂園が全国準優勝とは見上げたものだ。

するとグラウンドの方で悲鳴やどよめきが聞こえてくる。
すると、扶桑高の連中が**こんな有り様**だった。

酷い。酷すぎる。**特に海パン姿のやつなんて、アホ一択**である。

当然、校長と監督は驚く。思わず、「なんだそのカッコウは！それがラグビーをやるカッコウかぁ！」と駆け寄ってしまう監督の気持ちも、痛いほどわかる。
部員達、「てっきり試合っていうけど、ラグビーだと思わなかったなぁ！」と**寝言をホザいている**。
それどころか、「弘法筆を選ばず、**ボウコウキンタマを選ばず**、俺達はユニフォームを選ばず･･･ってところさ！」と、**うまいことをいっているのかただのバカなのかわからないセリフ**を吐く始末。**闇討ちに失敗した分際で**、本当にカスな奴らだ。

監督「こいつら、最初から試合なんかなんとも思っちゃいねえな･･･」と悟るが早く、またもやとんでもない提案をした。
監督「**もし、おまえらが 200 点差以内の負けですんだら･･･俺はすっぱだかでこのグラウンドを逆立ち 1 周してやるよっ！！**」
周りのギャラリーがどよめくのも当然だ。

しかし、脳が単細胞な扶桑高ラグビー部員は、「それじゃなにかァ～～！おれたちゃあ 200 点以上も差をつけられて負けるってことかぁ！」と**またもや監督に乗せられてしまう**。
そして、監督に逆立ちストリップをやらせるために、まともに試合をやることを決意した。

こういうギャグを放ちながらも、なんとか着替えてきた扶桑フィフティーン。だんだん三枚目になってきたか？

叶「これだけの人前で恥かかされりゃあ･･･監督なんかやっていられなくなるぜ！」
監督「さあ･･･恥かかされるのはどっちだか」
叶「**監督が男だか女だかわからなくなってきた･･･ぜひはだかにして試したくなってきたぜ･･･**」
と**叶まで変なことを言い出し**、試合に臨むのであった。男だったら、逆立ちストリップをしても恥にならない、ということなのだろうか？**十分恥だと思うが**。